

そこはきつとボクの部屋だろう。暗くてよく見えないが、真ん中に机が一つ置いてあるのがわかる。机の上には、大きな砂時計。あの砂時計は、前にも見たことがある。誰かが電話をかけている。やがて、受話器を握った男がぼんやりと浮かび上がる。やっばりボクだ。あの受話器は、父さんからもらった携帯電話だ。ボクが電話を切った。そして、受話器を机の上に置いた。

ボク

次の日、ボクは勇気を出して、彼女の部屋に電話をかけた。たぶん、彼女は出ないだろう。出ても、話はしてくれないだろう。そんなことはわかっていたけど、ボクにはどうしても言いたくないことがあった。このまま彼女と別れてしまったら、ボクにはボクが許せない。彼女はボクだと気づいた瞬間、電話を切ってしまうかもしれない。それでもボクは、彼女の部屋の番号を押した。

ボクが電話をかけた。やがて、電話を切った。

ボク

それから十年。ボクは今でも、彼女の部屋の番号を押し続けている。今では、彼女は別の部屋で、別の電話を使っているだろう。他の誰かと結婚して、子供も生まれて、ボクのことなんかすっかり忘れているだろう。それ

でも、ボクは電話をかける。十年前のこの番号で。この番号を押し続けているれば、いつかはあの時の彼女につながるかもしれない。ボクの祈りは光の速さを超えて、時の流れを逆上るかもしれない。

ボクが受話器を机の上に置いた。

ボク 十年前。ボクが彼女と別れた時、ケンジは六年生になったばかりだった。

ボクが机の上の砂時計を持ち上げた。そして、ゆっくりと逆さにした。ボクのすぐ後ろに、ケンジが立っていた。

ケンジ 兄さん、ただいま。

ボク あれ？ 今日はずいぶん早いな。

ケンジ 今日は終業式。母さんは？

ボク 仕事じゃないかな。

ケンジ なんだ。せっかく通信簿を見せようと思ったのに。

ボク ほう。さては、成績が上がったのか？

ケンジ 見てみる？（と通信簿を見せる）

ボク うわー！ 二つも下がってる！ それなのに、ちっとも落ち込んでないのはなぜだ！

ケンジ これで母さんも気がつくと思うんだ。ボクに受験は無理だって。

ケンジがカバンを下ろして、机に向かった。

ボク

母さんは、ケンジを私立中学に行かせようとしていた。五年のうちから家庭教師をつけて、なんとか勉強させようと必死だった。もちろん、ケンジはいやがった。が、いつの間にか、家庭教師が来るのを楽しみにするようになった。母さんは、「やっとな勉強が好きになったのね」と喜んだが、それはとんでもない誤解。ケンジは勉強じゃなくて、カヌーが好きになったのだ。

そこへ、コーキチくんがやってきた。

コーキチくん

ジャジャーン！（とパドルを差し出す）

ケンジ

あ！パドルだ！

コーキチくん

そうだ、フオールディング・カヤック用のダブルブレード・パドルだ。いいだろう？

ケンジ

それ、コーキチくんの？

コーキチくん

そうだ、俺のだ。いいだろう？

ケンジ

また新しいの買ったんだ。最近の大学生はリッチだね。

コーキチくん

そうだ、最近の大学生はみんなリッチだ。しかし、俺だけはプアーだ。だから、朝飯を食パン一枚にして、昼飯をカップラーメンにして、夕飯を抜きにして、やっとなの思いで買ったんだ。いいだろう？

ケンジ

いいなあ。

コーキチくん

よし。やっとな「いいなあ」って言ったな？　じゃ、おまえにあげよう。

ケンジ

え？

ボクにくれるの？　タダで？

コーキチくん

え？　ボクにくれるの？　タダで？

ケンジ

え？　ボクにくれるの？　タダで？

コーキチくん

え？　ボクにくれるの？　タダで？

コーキチくん 気にするな。どうせ、おまえの授業料で買ったんだから。
ケンジ ということは、もともとボクんちの物ってわけか。

コーキチくんがケンジの手からパドルを取り上げた。

ボク

コーキチくんは早稲田の三年生で、サークルにも入らずにまじめに勉強する、川男だった。川男。そう、彼はカヌーイストだったのだ。暇さえあれば、カヌーを背負ってリバー・ツーリングに出かけていた。ケンジの家庭教師をやっていたのも、そのための資金稼ぎ。勉強嫌いのケンジの気を引こうとして、コーキチくんは毎日カヌーの話をした。すると、ケンジは勉強好きになるかわりに、川男になつてしまったのだ。

そこへ、母さんがやってきた。

母さん あらあら、お勉強はまだ始まらないのかしら。

ケンジ 母さん、見て見て。パドルだよ、パドル。コーキチくんにもらったんだ。

母さん コーキチくんじゃなくて、コーキチさんでしょう？

ケンジ 明日、一緒に多摩川へ行くことにしたんだ。行ってもいいよね？

母さん カヌーはダメよ。コーキチさん、あなたには勉強を教えただくために

母さん 家庭教師をお願いしたんですけど。

コーキチくん お母さん、わかりませんか。アメとムチですよ。

母さん あなたはアメばかりじゃないの。

ケンジ ボクは乗らないよ。見てるだけだからさ。

母さん 明日は、お父さんに会いに行く日でしょう？

ケンジ そうか、面会日か。

母さん そうじゃなくても、もう遊んでる暇なんかないのよ。来月からは六年生な

んだから。

ケンジ でも、母さん。ボクの成績。(と通信簿を見せる)

母さん 何よ、これ。二つも下がってるじゃないの。

母さん しかも、国語と算数じゃないか。

母さん あなたがケンジに教えているのは？

母さん 国語と算数です。
(ケンジの手からパドルを取って) あなたがアメばかりだから。

母さんがコーキチくんをパドルで叩いた。

ボク

一応、母さんのために弁護しておく、母さんは別に教育ママってわけじゃない。ケンジの同級生の母親に比べたら、まだ甘い方だ。口では勉強勉強強ってるさいけど、心の中では勉強だけでもロクな人間にはならない。強ってわかっている。それでもケンジを私立中学へ行かせようっていうのは、きつと父さんのせいだ。父親のいる子に負けさせたくない。そんな思いが、母さんに教育ママを演じさせたに違いない。

母さんはパドルを持って出ていった。ケンジは後を追いかけた。コーキチくんもそれに続いた。

ボク

父さんは、吉祥寺のマンションで、一人で暮らしていた。どうしてそういうことになったのか、ボクにもはつきりした記憶はない。いつの間にか、月に一度、マンションへ遊びに行くことになっていた。面会日。それはとても楽しいけど、とてもいやな一日だった。ボクが父さんに会っている間母さんは一人ぼっちだったから。楽しければ楽しいほど、ボクは罪悪感でいっぱいになった。小学生のケンジにとっては、なおさらだったろう。

チャイムの音。父さんがエプロン姿でやってきた。

父さん

ケンジか？ 鍵なら開いてるぞ。

反対側から、ケンジがやってきた。

ケンジ

オス。

父さん

オス。

ケンジ

どう、これ。(とパドルを差し出す)

父さん

凄いな。母さんに買ってもらったのか？

ケンジ

まさか。コーキチくんがくれたんだ。六年生になったお祝いだつて。

父さん

しまった、先を越されたか。

ケンジ

え？ それじゃ、父さんも何かくれるの？

父さん

ほら。(と携帯電話を差し出す)

ケンジ

携帯電話か。

父さん

これさえあれば、いつでも父さんに電話できるぞ。同級生にいじめられた

ケンジ

ら、すぐにかけるんだ。父さん、どこにいても飛んでいってやるから。

父さん

いいよ。いらんないよ。
え？ どうして？

ケンジ

父さん

ケンジ

父さん

ケンジ

父さん

ケンジ

父さん

ケンジ

父さん

ケンジ

父さん

わかってないな。こんなの持ってたら、生意気だつて、逆にいじめられるじやないか。それより父さん、今日も井の頭公園へ行く？

またボートに乗るのか？

こいつを実際に使ってみたいんだ。

そうか。こいつは船を漕ぐのに使うものだったのか。いわゆるオールとい

うやつだな？

バカ。パドルだよ。

今、バカって言ったな？ 父さん、傷ついた。

だって、前に本で見たじゃないか。

そうだ。父さんは、一度名前を教えてもらっても、すぐに忘れてしまうバ

カだ。しかし、バカに向かってバカと言つてもいいものだろうか。髪の毛

のいっばいある人にハゲと言つても、その人は全然気にしないだろう。し

かし、ハゲに向かつてハゲと言つたら、ハゲは怒るぞ。

悪かったよ。もう言いません。

ボートは、また今度にしないか？

え？ なんで？

今日はお食事にしよう。今、準備してるところなんだ。

それでエプロンなんかしてるんだ。

どうだ、似合うだろう？

似合う似合う。でも、父さん、料理なんかできたっけ？

今日まで隠して悪かったけど、実は父さんは梅宮辰夫なんだ。今日はち

よっと本気を出して、フランス料理を食わせてやるぞ。あと三十分ぐらい

でできるから、テレビでも見てろよ。

ケンジ
父さん
ケンジ

食事なんか後でいいよ。ボートに乗ろう。

おまえは本当にボートが好きだな。

ボートじゃなくて、カヌーが好きなの。でも、母さんは中学生なるまでダメだって言うんだ。ボートもダメだって言うんだ。ボクがボートに乗れるのは、ここに来た時だけなんだ。

ちよつと待て。おまえは父さんの所へ、ボートに乗りに来てるのか？

父さん
ケンジ

そうだよ。

父さん

父さんより、ボートの方が好きなのか？

ケンジ

そんなの比較できないよ。

父さん

今、どっちか一つを取って言われたら？

ケンジ

やっぱりボートかな。

父さん

父さん、傷ついた。

そこへ、エプロン姿の若い女の人が出てきた。カオルさんだ。

カオルさん

先生、お鍋が煮立ってるんですけど。

父さん

あ、ケンジ、この人に会うの、初めてだよな？ この人は、父さんがお世話になつてる出版社の人で、オオバカオルさん。

カオルさん

初めまして。

父さん

カオルさん、こいつがケンジです。ほら、ケンジ、ご挨拶しろよ。

ケンジ

(頭を下げる)

父さん

カオルさんは料理が得意なんだ。肉じゃがなんか、絶品だぞ。だから、今日は助っ人に来てもらったってわけさ。

カオルさん 先生、お鍋、どうしましょう？
父さん あ、ボクが見てきます。

父さんが走り去った。

カオルさん ……もうすぐできるから、一緒に食べない？ 味の方は、あんまり保証で

きないけど。

ケンジ ……。

カオルさん （小声で）本当言うかね、私、料理は苦手なの。今日も家を出る前に本を
読んできたんだけど、わけがわからなくなっちゃって。

父さんが戻ってきた。

父さん 弱火にしときましたから、灰汁が出たら、すくってください。

カオルさん わかりました。

カオルさんが去った。

ケンジ 父さん。

父さん 何も言うな。おまえの言いたいことはわかってる。まあ、座れ。

父さんが腰を下ろした。

父さん

あの人と知り合ったのは一年前だ。ここへは、ちよくちよく原稿を取りに来てる。それが、いつの間にか掃除や洗濯までしてくれるようになった。驚いちゃうよな。

ケンジ
父さん

父さん。
待て待て。俺は別に、おまえにのろけようっていうんじゃない。ただ、こういうことは生まれて初めてなんで、正直言っただ戸惑ってるんだ。母さんと結婚した時だって、好きになったのは父さんの方だった。プロポーズしてから、OKをもらうまで、一年以上もかかったんだ。

ケンジ
父さん

でも、家を出ていったのは、父さんの方だろうか？
まあな。あの時は、もう二度と結婚することはないだろうと思った。それぐらい、父さんは女の人に縁がないんだ。女の人の方から好きですって言われたら、どうすればいいのか、わからないんだ。どうしようケンジ。
嘘つき。

ケンジ
父さん

俺は嘘なんかついてないぞ。

ケンジ
父さん

父さんは、あの人と結婚するつもりなんだろう？
まだ決めてない。

ケンジ
父さん

決めたから、ボクに会わせたんだろう？

ケンジ
父さん

おまえがいいって言ったたら、決めようと思ってるんだ。
それなら、九十九パーセント決まってるようなもんじゃないか。

ケンジ
父さん

おまえがダメだと言っうなら、俺は諦める。
やっぱりあの人が好きなんだ。
俺を好きになっってくれた人だからな。

ケンジ それなら結婚すればいいだろう？

父さん おまえはいいのか？

ケンジ ボクは関係ないよ。

父さん 関係あるさ。俺はあの人より、おまえの方が大切だ。俺自身より、おまえ

ケンジ の方が大切だ。

父さん ボクに責任を押しつけるなよ。

父さん 親が子供を愛して、どこが悪い。

ケンジが走り去った。

父さん ケンジ！

カオルさんがやってきた。

父さん 料理の方、お願いします。

カオルさん すいません、いきなり顔を出しちゃって。

父さん きつと公園ですよ。一緒にボートに乗ってきます。

父さんが出ていった。

カオルさん あれ。

カオルさんが、机の上に残っていたパドルを取り上げた。そこへ、ケンジが戻ってきた。

カオルさん　　これを取りに来たんでしょう？

ケンジがパドルに手を伸ばす。が、カオルさんはよけた。

カオルさん　返してほしかったら、私と一分だけ話をしてよ。

ケンジ　　…話って何。

カオルさん　カヌーのこと。

ケンジ　　カヌーの何。

カオルさん　ケンジくんは、どうしてカヌーが好きなわけ？

ケンジ　　おもしろいからだよ。

カオルさん　どこが？

ケンジ　　自分の力で動かせるからだよ。

カオルさん　ふーん。でも、それはボートだって同じよね？

ケンジ　　ボートは後ろ向きに乗るだろう？　カヌーは前向きに乗るんだ。

カオルさん　そう言えばそうね。

ケンジ　　カヌーは、水の上を自由に走り回れるんだ。川だって下れるし、海だって

渡れるんだ。どこでも、自分の行きたい所へ行けるんだ。

カオルさん　でも、水の上だけでしょう？

ケンジ　　地球の七十パーセントは水なんだよ。

カオルさん　そうか。なんだかおもしろそうね。私もやってみたくなっちゃった。

ケンジ　　無理しなくていいよ。

カオルさん　無理って？

ケンジ　　ボクに気に入られようとして、おもしろそうって言ったんだらう？　そん

カオルさん
ケンジ

なことになくなっちゃって、ボクは別に構わないんだ。
私はただ、ケンジさんと話がしたいのよ。
したってしなくなっちゃって同じだよ。父さんと結婚したければすればいい。ボクは関係ない。だって、別にボクの母さんになるわけじゃないし。もう一分経ったよね？

ケンジがパドルに手を伸ばす。が、カオルさんはよけた。そして、エプロンのポケットからペンと紙を取り出し、何かを書いた。

カオルさん

やっぱりケンジくんにも関係あるんじゃないかな。
何が？

カオルさん

だって、私はカヌーに興味を持ったんだもの。カヌーイストの候補生ってわけよ。同じカヌーイストとして、いろいろ教えてほしいわ。
他の人に聞けばいいだろう？

ケンジ

ケンジがパドルに手を伸ばす。と、カオルさんは紙を差し出した。

カオルさん

私んちの住所と電話番号。よかったら遊びに来てよ。

ケンジ

(紙を取って) ボクが行くと思う？

カオルさん

来てくれたら、一緒にボートに乗ってあげてもいいな。

ケンジ

その手には乗らないよ。(と紙を差し出す)

カオルさん

(紙をよけて) バカね。わざと乗ったふりをすればいいじゃない。そうすれば、パドルが使えるのよ。

ケンジがパドルを奪い取る。そして、走り去った。

カオルさん (目を閉じて) どうか電話がかかってきますように。

ランドセルを背負った女の子がやってきた。ケンジの同級生のアベさんだ。ランドセルの中から、教科書やノートや筆箱を取り出して、机の上に並べる。そこへ、コーキチくんが走ってきた。

コーキチくん

いや、遅くなっちゃってごめん。新宿駅のホームで大学の先輩に会っちゃってさ。リュックなんか背負ってるから、「どこか行くんですか？」って聞いたら、「今、長良川から帰ってきたところだ」って言うんだ。もちろん、リバー・ツーリングをしてきたのさ。いろいろ話を聞いてるうちに、ふと時計を見てみたら、5時間も経ってた。まさに、「光陰矢の如し」だな。というわけで、今日はことわざの勉強だ。「光陰矢の如し」の意味はなんだ、ケンジ？

アベさん

月日が経つのは、矢のように早い。だから、時間を無駄にしないで、しっかり勉強しよう。

コーキチくん

よし、正解だ。ところで、君は誰だ。

アベさん

私のことは気にしないで、授業を先に進めてください。

コーキチくん

そういうわけにはいかないよ。あれ？ 俺、家を間違えちゃったのかな？

アベさん

そこはキミハラケンジの家だよ。

コーキチくん

そうですよ。やっぱりそうか。でも、君はケンジじゃない。君は一体誰だ。

アベさん
コーキチくん

アベさん

コーキチくん
アベさん
コーキチくん

アベさん
コーキチくん
アベさん

コーキチくん
アベさん
コーキチくん
アベさん
コーキチくん
アベさん

妻のチカコです。いつも主人がお世話になってます。なんだ、ケンジの奥さんですか。ビックリさせないでくださいよ。ケンジのやつもひどいよな。結婚してるならしてるって、言ってくれればいいのに。ちよつと待て。

主人はまだ帰ってきてないですよ。朝から進学塾へ出かけてまして。もうしばらく待っていただけませんか？ その間は、私が授業をお伺いしますんで。

もしかして、君、アベさん？
あら、ご存知ですか？

バレンタインデーに、ケンジにこんなにつかい手作りチョコレートをくれたアベさん？

恥ずかしい。主人たら、そんなことまでお話ししてるんですか？
「いらぬ」って断ったら、家まで追いかけてきたアベさん？

「受け取らないなら、この場でいっぺんに食べて、鼻血をドバツと出して、出血多量で死んでやる」って言ったたら、やつと受け取ってくれました。

その君が、どうしてこんな所にいるの？
一緒に勉強しようと思つて。

あのね、ボクはケンジの家庭教師であつて、君の家庭教師じゃないんだよ。私は横で静かにしてます。授業はあくまでも、主人中心で進めてください。

でも、君が横にいと、ケンジのやつ、気が散るんじゃないかな。
男を惑わす罪な女？ いやだ、私つたらまだ十二歳なのに。

だから、今日のところは黙って帰ってくれないか？
私は別に帰つてもいいんですけど、姉はなんて言うか。

コーキチくん

なんで君のお姉さんが出てくるんだよ。

アベさん

聖心女子大英文科一年、趣味・エレクトーン、ただいま恋人募集中、の姉

がなんて言うか。

コーキチくん

……ま、一人教えるのも二人教えるのも同じだよな。

アベさんとコーキチくんが握手をする。そこへ、ケンジがやってきた。

ケンジ

あ、アベチカコ！

コーキチくん

さあ、ケンジ、勉強を始めるぞ。

ケンジ

でも、コーキチくん、どうしてアベさんがこんな所に？

コーキチくん

男がいちいち細かいことを気にするんじゃない。

アベさん

そうよ、あなた。早く私の横に座って、あなた。

ケンジ

あなたじゃない！　こらアベチカコ、おまえ、いつからボクの奥さんにな

アベさん

ったんだよ。

ケンジ

ケンジくんが、チョコを受け取った時からよ。

アベさん

あれは、おまえが無理矢理押しつけたんだらう？

ケンジ

でも、受け取ったじゃない。あの時から、私たちは永遠に結ばれたのよ。

コーキチくん

あれなら、返すよ。あんなもので永遠に結ばれてたまるか。コーキチくん、

ケンジ

あのチョコ、アベさんに返してあげてよ。

コーキチくん

はい、どうぞ。（と手を出す）

アベさん

何だよ、これ。

あのチョコは、今では俺の血となり、肉となっている。

あなた、私のチョコを食べたの？

コーキチくん
アベさん

とつてもおいしかったよ。来年は、君のお姉さんのチョコが食べたいな。ひどい。ひどいわよケンジくん。私が一週間も徹夜して作ったチョコを、こんな男に食べさせるなんて。

コーキチくん
アベさん

こんな男？
そうよ。自分の教え子がもらったチョコを平気で食べる、厚顔無恥な男よ。でも、私に協力してくれたら、許してあげてもいいわ。姉によるしく伝えておくわ。

コーキチくん

よし、わかった。こら、ケンジ。おまえには、女心つてものが全然わかってないぞ。おまえに悪気はなくても、アベさんの心はすっかり傷ついてしまったんだ。

アベさん

責任取ってよ。

ケンジ

何だよ、責任で。

アベさん

私にも、この先生の授業を受けさせて。
俺は全然構わないよ。一人教えるのも二人教えるのも同じだし。授業料なら、気にしなくていい。あのチョコが授業料だったってことにしようじゃないか。

ケンジ

でも、こいつがいると、うるさくて勉強にならないよ。

コーキチくん

おまえ一人だつて、カヌーの話ばかりで勉強にならないだろう？

ケンジ

そう言えば。(とカバンの中から地図を取り出して) 見てよ、この地図。これ、どこの地図だ？

コーキチくん

名古屋だよ。コーキチくんがこの前、言つてたじゃないか。日本で一番きれいな川は、長良川だつて。
一番は高知の四万十川だ。長良川は二番だな。

ケンジ

コーキチくん

ケンジ

コーキチくん

アベさん

コーキチくん

そこへ、セコ先輩がやってきた。

セコ先輩

コーキチくん

セコ先輩

コーキチくん

ケンジ

セコ先輩

アベさん

ケンジ

コーキチくんはどの辺を下ったの？

それがその、俺は長良川へは、まだ行ったことがないんだ。

え？ カヌーイストのくせに、長良川へ行ったことがないの？

カヌーを始めて、まだ三年だからな。でも、俺の知り合いに、カヌー歴六年で人がいる。その人に話を聞いてみようじゃないか。(と窓を開けて)

セコ先輩！ ちょっと来てください！

誰よ、セコ先輩って。

俺の大学の先輩で、俺にカヌーを教えてくれた人だ。駅で話をしてるうちに盛り上がっちゃって、今夜は俺んちに泊まることになったんだ。授業が終わるまで、外で待ってるって言ってたんだけど。

なんだ、コーキチ。

先輩、この地図を見てください。(と地図を差し出す)

これは、名古屋の地図だな？

そうです。(ケンジを示して) こいつが、長良川について知りたい言うんで。

セコ先輩は、どの辺を下ったんですか？

この郡上八幡で所から、岐阜までだ。六十キロを三日で下った。あんなに流れの激しい川は他にないね。三級四級は当たり前って感じだった。

三級四級って何？

おまえは黙ってる。

セコ先輩

アベさん

コーキチくん

セコ先輩

コーキチくん

セコ先輩

ケンジ

コーキチくん

セコ先輩

ケンジ

セコ先輩

ケンジ

セコ先輩

コーキチくん

アベさん

コーキチくん

バカ者！ レデイに向かつて、「黙ってる」とはなんだ。カヌーは思いやりのスポーツだぞ。川を思いやり、魚を思いやり、レデイを思いやる。それができない人間に、カヌーをやる資格はない。そうよそうよ。

いいかい、アベさん。三級四級っていうのは、流れの激しさを表す数字なんだ。一級は波静か、二級は波少し、三級は波やや高し。

初心者は三級が限界だ。死にたくなかったら、やめた方がいい。

四級は波高し、五級は波一メートル以上、六級は漕行不可能。

六級になると、俺でも限界だ。そんな所に出くわしたら、素直にカヌーを降りて、岸を歩く。

歩いてもいいの？

カヌーはスポーツであると同時に、遊びでもあるんだ。大切なのは、川と遊ぶって気持ちさ。遊びは一生懸命やればやるほど楽しくなるけど、命を懸けてまでやるべきじゃない。

君はまだカヌーに乗ったことがないのか？

はい。

それなら、コーキチの時みたいに、俺が一から教えてやろう。最初は二人乗りのカナディアン・カヌーがいいな。

ボクは、ホールディング・カヤックがいい。一人乗りの。

いきなり一人艇は危ないだろう。

一級の川なら大丈夫ですよ。この近くで一級の川っていうと……。

学校の裏を流れる川は？

神田川か。あの川は、カヌーイストにとっては、川とは呼べないな。

ケンジ
セコ先輩

何も知らないくせに、横から口を出すな。
バカ者！ レデイに向かつて、「口を出すな」とはなんだ。

そこへ、母さんがやってきた。

母さん

あらあら、地図なんか広げて、またカヌーの話？

コーキチくん

違いますよ。今日は、地理の勉強をしようと思ひまして。

母さん

あなたがケンジに教えているのは？

コーキチくん

国語と算数です。

ケンジ

母さん、今度の日曜は、多摩川へ行ってもいいよね？

母さん

日曜だって、塾はお休みじゃないでしょう？

ケンジ

そんなこと言ったら、ボクには春休みがなくなっちゃうよ。

母さん

昨日は一日、お父さんの所でのんびりしてきたじゃない。

ケンジ

でも、ボートには乗れなかった。

母さん

どうして？

ケンジ

ねえ、母さん。一日だけでいいからさ。カヌーには絶対に乗らないから、

母さん

行ってもいいでしょう？

母さん

コーキチさん、あなたが誘ったんですか？

母さん

まさか。でも、見るだけなら、一回ぐらいは。

ケンジ

コーキチさんが乗ってるのを見れば、ケンジもきつと乗りたくなるの。

母さん

乗らないよ。約束する。

母さん

ケンジが約束を破らない子だってことはわかってるわ。でも、親っていうのはね、いつも破られた時のことを考えておくものなの。

ケンジ
母さん

アベさん

ケンジ

セコ先輩

母さん

セコ先輩

心の底では信用していないんだ。

カヌーは自然と戦うスポーツでしょう？ ケンジが一人で戦って、もし負

けちゃったら、母さんはどうすればいいのよ。

そうよ、あなた。お母様のことを思うなら、カヌーは我慢しましょう、あ

なた。

うるさい。おまえはさっさと家へ帰れ。

バカ者！ レディに向かって、「帰れ」とはなんだ。

そういうあなたは一体どこのどなたですか？

じゃあな、ケンジ！

セコ先輩が去った。

ボクがやってきた。

ボク

ケンジ

ボク

ケンジ

ボク

ケンジ

ボク

ケンジ

ボク

ケンジ

ボク

ケンジ

ボク

ケンジ

ケンジ。(とパドルを差し出す)

(受け取って) あーあ。やっぱりこいつは使えないのか。

一つだけ方法があるだろう。

それだけは絶対にいやだ。

こう考えたらどうか。おまえはパドルを使うために、カオルさんの家へ

行くんだ。カオルさんを利用するんだよ。

でも、母さんに知られたら。

パドルを使わせてくれないのは、母さんなんだぞ。

みんなボクのためを思っていないか。

おまえは本当にいい子だな。

ボクは兄さんとは違うんだ。

そう。俺はおまえとは違う。だから、カオルさんに会いに行く。

母さんを裏切るのか？

バカ。おまえは父さんのことを忘れてるぞ。父さんがこれから一緒に暮ら

す人が、とんでもない女だったらどうする。手遅れになる前に、確かめて

おいた方がいいと思わないか？

ボクは関係ないよ。

ボク

ケンジ

ボク

ケンジ

ボク

ケンジ

ケンジはボクに紙を押しつけて、走り去った。

ボク

カオルさんの家は、下高井戸のアパートだった。駅から電話をかけようとしたら、小雨がポツポツ降り始めた。カオルさんは、傘を二本持つて迎えに来てくれた。駅前の通りを歩きながら、あの喫茶店はチーズケーキがおすすめとか、あのラーメン屋は一日に一人しか客が来ないとか、しつこいぐらいに説明してくれた。おかげで、ボクはすっかり下高井戸に詳しくなつた。部屋に入れば入ったで、お茶はどう、お菓子はどうって、五分もじつとしていない。そこで初めて気がついた。カオルさんは、ボクと二人きりになつて、緊張していたのだ。

そこへ、カオルさんがやってきた。

カオルさん

これこれ。この本は見たことある？（と本を差し出す）

カオルさん
ボク

そうなの？
母さんが言ってた。母さんのスケッチブックを父さんが見て、話を考えた
って。

カオルさん

それじゃ、絵が話に合ってるのも、当たり前ね。

ボク

今、二人で本を作っても、そんなふうにはならないだろうな。

カオルさん

でも、もし作れたらおもしろいわね。

ボク

無理だよ。すぐにケンカになるよ。

カオルさん

そんなことないわよ。二人とも、プロなんだから。

ボク

それで二人が仲直りしちゃったら、困るんじゃないの？

カオルさん

うーん。ちよつと困るかな。

ボク

大丈夫だよ。母さんは、もう童話の挿絵は書かないんだから。今は雑誌の
イラスト専門なんだ。

カオルさん

この本ね、高校生の時にプレゼントしたことがあるの。

ボク

それってもしかして、初恋？

カオルさん

うーん、二人目。

ボク

相手は誰？ 同級生？

カオルさん

同級生のお兄さん。大学生でカッコよかったのよ。

ボク

大学生にこの本を？ そりゃ、うまくいくわけないわ。

カオルさん

そうなの、うまくいかなかったの。誕生日にプレゼントしてさ、次の日、

ボク

また遊びに行ったら、妹の本棚にこの本があったの。

カオルさん

その人、読まないで、妹にあげちゃったんだ。

ボク

あの時は泣いたわ。

カオルさん

それと同じことをした人を知ってる。

ボク

カオルさん
ボク
カオルさん

まさか、自分じゃないでしょうね？
違うよ。

それだけはやっちゃダメよ。女の子のプレゼントにはね、男の子が思う三十倍ぐらいの気持ちがおもってるのよ。一度受け取ったら、ちゃんと責任を取らなくちゃ。

ボク
カオルさん

よく言っておく。
でも、その人には、この本のよさがわからなかったのよね。そう思えば、悔しさも少しは紛れた。

ボク
カオルさん

そんなにいい本なのかな。
私もそんな本が作りたいと思ってさ、それで出版社に入ったのよ。そして、部長が「今度、ウサミ先生の本を出すことになった」って言うじゃない。「やらせてやらせて」って、大声で叫んじゃった。

ボク
カオルさん

それで今度は結婚か。
これって、運命だと思わない？

ボク
カオルさん

ただの偶然なんじゃない？
夢がないなあ。
それはこつちが言いたいよ。あんな冴えないおじさんと結婚しちやったら、

ボク
カオルさん

夢もロマンもないでしょう。
そんなことないわよ。君は息子だから、父親のよさがわからないの。
妻と子供を置いて、家を出ていったんだよ。

ボク
カオルさん

今度は絶対に出ていかせないわよ。
もっといい人がいると思うけどな。年下なんかどう？
早稲田の三年生で
さ、貧乏だけど性格はなかなかいいんだ。

カオルさん

紅茶のおかわり、どう？ 新しくいれなおすからさ。

カオルさんが去った。反対側から、ケンジがパドルを持ってやってきた。

ケンジ

兄さん、いつまでいるつもりだよ。

ボク

なんだ、おまえも来てたのか。さては俺を尾行してきたんだな？ 今まで

ケンジ

外で待ってたのか？

ボク

一時間も何、話してたんだよ。

ケンジ

いや、お茶とかお菓子とか、いろいろ出してくれるからさ、つい。

ボク

「つい」じゃないよ。こんなに遅くなったら、母さんが心配するじゃない

ケンジ

か。

ボク

カオルさんは、父さんのファンだったんだ。父さんの本が好きなんだって

ケンジ

さ。

ボク

そうなの？ やっぱり悪い人じゃなかった。きっと父さんと仲良くしてくれるよ。

ケンジ

母さんだって、最初はそうだったんだよ。

ボク

そう言えばそうだな。

ケンジ

でも、いつまでも仲良く暮らすのは、とつても難しいことなんだ。

ボク

あーあ。難しいこと考えないで、みんな一緒に暮らせればいいのにな。

ケンジ

みんな一緒って？

ボク

だから、父さんも母さんもカオルさんも、一つの家で暮らすのさ。

ケンジ

そんなことしたら、一夫多妻制になっちゃうじゃないか。

ボク

だから、そういう難しいことは考えないの。

ケンジ
ボク

それじゃ、コーキチくんも呼んでいいかな。
いいよ。人数が多い方が楽しいもんな。ついでに、セコ先輩とアベさんも
呼んじやおう。

ケンジ
ボク

アベさんはやめない？
バカ。一度チョコを受け取ったら、おまえはもう逃げられないのだ。

カオルさん・父さん・母さん・アベさん・コーキチくん・セコ先輩がパドルを持ってや
ってきた。みんなでパドルを漕ぐ。楽しい川下り。が、ケンジが突然、手を止める。

ケンジ
ボク

やっぱりダメだよ。
どうして？

ボクのカヌーには、一人しか乗れないんだ。

アベさんがやってきた。ランドセルの中から、教科書やノートや筆箱を取り出して、机の上に並べる。そこへ、母さんがやってきた。

母さん　ごめんね、待たせちゃって。

アベさん　気にしないでください。勉強は一人でもできますから。

母さん　塾は二時間も前に終わってるはずなんだけどね。どこかで寄り道でもしてるのかな。

アベさん　たまにはいいんじゃないですか？

母さん　でも、この春休みはしっかり勉強するって約束したのよ。

アベさん　今まで全然やらなかった子に、いきなりやれって言っても無理ですよ。結局は、本人がやる気にならなくちゃ。

母さん　それがなかなか難しいのよね。

アベさん　あのタイプは、餌で釣ってもダメなんですよね。性格がのんびりしてるから。かと言って、ガミガミ言うとはねくれるし。

母さん　そうそう、あの子の父親もそうだった。

アベさん　「こうこうだから、こうするしかないでしょう？」って説明しても、

母さん　「それはそうだけど」って考え込んでるしちゃうし。

アベさん　頭では納得しても、すぐに行動に結び着かないのよね。一言で言えば、グズ。

母さん
アベさん

親子揃ってグズグズよ。
だから、焦っちゃダメなんです。今はどんなにやがられても、いつかは
思いが通じる日が来る。それだけを信じて、アタックを続けるしかないん
です。

母さん
アベさん

でも、受験まで、あと一年しかないのよ。
一年あればなんとかなりますよ。卒業して、別れ別れになる前に、何が何
でもデートしてやるからな。

母さん
アベさん

デート？

お母様。いえ、ごめんなさい。お婆さんはケンジくんのお母さんで、私の
お母さんじゃないけど、もしよかったら、お母様って呼ばせていただけま
せんか？

母さん

別にいいわよ。お婆さんなんて呼ばれるの、あんまり気持ちのいいものじ
ゃないし。

アベさん
母さん
アベさん

お母様。私たち、仲良くしていただけますよね？
私より、ケンジと仲良くしてやってね。
もちろんですよ。

母さんとアベさんが握手をする。そこへ、ケンジがやってきた。

ケンジ
母さん

あ、アベチカコ！
ケンジ。こんな時間まで、どこで道草を喰ってたの？ せっかくアベさん

アベさん

が遊びに来てくれたのに。
私のことはいいんです、お母様。

ケンジ 母さん
ケンジ 母さん
ケンジ 母さん
ケンジ 母さん
ケンジ 母さん
ケンジ 母さん
ケンジ 母さん
ケンジ 母さん
ケンジ 母さん
ケンジ 母さん
ケンジ 母さん
ケンジ 母さん

おまえは黙ってる。
お父さんの所で会ったの？
もう知ってるんだ。
話は前から聞いてるわ。そうなの。もう会わされたの。
母さんはいいの？
何が。
父さんが結婚しちやっついていいの？
そんなの、いいも悪いもないでしょう。お父さんは独身なんだから、誰とだって結婚できるのよ。
でも、母さんは結婚しない。
別にしたいと思わないんだもの。
嘘だね。ボクがいるから、したくてもできないんだ。
バカね。私はこう見えても、もてるのよ。お父さんと離婚してからだって、何回にプロポーズされたか、覚えてないわ。でも、全部断ったの。
ボクがいやな思いをしなないように？
私がいやな思いをしたくないから。結婚なんて、一回でたくさんよ。
父さんのことが、まだ好きなんだ。
好きなら、離婚するわけないでしょう？
離婚したのは、父さんが家を出ていったからだろう？
お父さんだけが悪かったんじゃないの。二人の考え方が、いつの間にか、違うものになってたのよ。仕事も生活も二人だけでやっていると、その違いが我慢できなくなるの。
でも、母さんは我慢した。

母さん

ケンジ

母さん

アベさん

ケンジ

母さん

ケンジ

母さん

ケンジ

母さん

ケンジ

母さん

ケンジ

母さん

アベさん

ケンジ

私だつて、そろそろ限界つて感じだつたのよ。お父さんが出て行った後、なんだかホツとしちゃつた。ちよつと淋しかったけどね。

もう淋しくないの？

私には、ケンジがいるじゃない。

でも、お母様。ケンジくんだつていつかは結婚するんですよ。

おまえ以外とな。

塾が終わつた後、カオルさんの家へ行つてきたの？

(うなずく)

パドルを持つて？

カオルさんは、自分の家へ来れば、ボートに乗せてやるつて言つたんだ。

ボクは行きたくなかつたんだけど。

そんなにパドルが使いたいの？

(首を横に振つて) 中学生になるまで我慢するよ。今は勉強しなくちゃ。

今度の日曜、私と多摩川へ行く？

日曜だつて、塾は休みじゃないからね。

せっかくお母様が誘つてくださつてるのよ、あなた。遠慮なんかしてないで、みんなでカヌーに乗りに行きましょう。私はお弁当を作つてくるわね。

あなた的大好きな梅干しのおにぎり、愛情込めてにぎつてくるから。

誰がおまえを誘つたんだよ。

ボクがやってきた。

ボク

雨は夜通し降り続けたが、朝にはだいぶ小雨になった。ケンジはやっぱりパドルを持って、塾へ出かけていった。母さんの誘いは断ったけど、パドルの練習はやめたくない。授業中は無理でも、昼休みなら練習できる。屋上のベンチに座って、ケンジは黙々とパドルを漕いだ。その時、雲の隙間から、日差しがサッと降り注いだ。ボクはケンジを屋上に残して、下高井戸へ向かった。まだ昼過ぎなので、カオルさんは部屋には帰ってないだろう。それならそれで、部屋の前で待てばいい。ところが、ドアをノックしてみると、カオルさんは中にいたのだ。

カオルさんがやってきた。パジャマの上に、ガウンを着ている。

カオルさん

ごめんね、せっかく来てもらったのに。

ボク

風邪？

カオルさん

そうみたい。昨夜から、ちよっと熱っぽかったのよね。

ボク

ボクが駅まで迎えに来させて、雨の中を歩かせたから。

カオルさん

どうしてくれるのよ。

ボク

ごめん。

カオルさん

ボク

カオルさん

ボク

カオルさん

ボク

カオルさん

ボク

カオルさん

ボク

カオルさん

ボク

カオルさん

ボク

カオルさん

ボク

カオルさん

ボク

カオルさん

ボク

カオルさん

うそうそ。さつき病院へ行つて、注射してきたから、もう大丈夫。

寝た方がいいよ。ボクは帰るから。

お茶くらい飲んでいきなさいよ。昨夜は、紅茶をいれてる間にいなくなつちやつて。「ごちそうさま」も言わないで帰るなんて、失礼じゃない？

ごちそうさま、でした。

いまさら遅い。今度は急いで入れるから、黙って帰らないでね。(と歩き出す)

カオルさん。

(立ち止まって) 何？

∴カオルさんは、父さんの本が好きなんだよね？

そうよ。

それって、父さんの考えとカオルさんの考えが、同じってことなのかな？

同じかどうかはわからないけど、かなり似てはいるんじゃない？

母さんも、最初はそうだったんだ。でも、いつの間にか、違うものになつたんだって。

お母さんがそう仰つたの？

カオルさんの考えも、いつの間にか、違うものにならないのかな？

∴人が一枚の絵だとしたらね、きつといろんな色が塗つてあると思うの。

青とか赤とか緑とか、いろんな色がね。で、自分の絵と他の人の絵を見比べて、ある日、気づくの。「あ、この人の青と私の青は同じだ」って。

うん。それで？

それで、その人の絵をもっとよく見ると、もっともつと気づくの。「この赤も同じだ。この緑も同じだ」って。そして、いつの間にか、その人のこ

ボク

カオルさん

ボク

カオルさん

ボク

カオルさん

カオルさんが去った。反対側から、ケンジがやってきた。

ケンジ

ボク

ケンジ

ボク

ケンジ

ボク

ケンジ

ボク

とが好きになってるの。でも、時間が経って、同じ色が全部見つけ終わると、今度は違う色に気づき始めるのよね。「この黒は私の絵にはない。この白は私の絵にはない」って。

でもね、絵っていうのはみんな違うのよ。違って当たり前なのよ。そのことさえ忘れなければ、なんとかうまくやっていけるんじゃないかな。

そういうこと。私としては、「なんとかうまくやっていけますように」って願ってるわ。

カオルさん、正直だね。

長野県民はみんな正直なの。よく覚えときなさいよ。

やっぱりここに來てたのか。

おまえも來ると思ってたよ。でも、パドルは使えないぞ。カオルさんは風邪をひいてるんだ。外には出られないし、ボートなんかとんでもない。

ボクは兄さんを連れ戻しに來たんだ。塾はいいのか？途中で抜け出したら、母さんに怒られるぞ。

人のことが言えるのかよ。母さんに黙って、またカオルさんに会いに來て。だから、俺はカオルさんがどんな人か、確かめるためにだな。

それは昨日で充分わかったじゃないか。それは昨日で充分わかったじゃないか。念には念を入れてだな。

ケンジ

嘘だ。兄さんは、カオルさんが好きなんだ。

ボク

バカ。相手は年上だぞ。

ケンジ

カオルさんに会って、話がしたかったんだ。母さんよりカオルさんの方が

ボク

好きなんだ。

ケンジ

そんなわけないだろう。母さんが知ったら、どんなに悲しむと思ってる

ボク

んだ。

ボク

どうしてそんなに母さんの肩を持つんだ。母さんはおまえにパドルを使わ

ケンジ

せてくれないんだぞ。

ボク

昨夜は「一緒に多摩川へ行こう」って言って言ってくれた。

ケンジ

カオルさんに負けたくないから言ったのさ。

ボク

ボクのためを思ってたよ。

ケンジ

ボクのためボクのためって、そんなに思ってもらえてうれしいのか？

ボク

本当は息苦しいんじゃないのか？

ケンジ

バカ！

そこへ、父さんがやってきた。

父さん

あ、ケンジ、どうしておまえがこんな所に。

ケンジ

ボクは、別に。

父さん

そうか。パドルが使いたくて来たんだな？ カオルさんが、「一緒にボ-

ケンジ

トに乗りましょう」って、誘ってくれたから。

ケンジ

違うよ。

父さん
ケンジ
父さん

残念だけど、カオルさんは病気なんだ。今日は諦めて、帰るしかないな。父さんは何しに来たの？

(スーパリーの袋を示して) 見ればわかるだろう、お見舞いに来たのさ。渋谷の本屋で立ち読みしたら、カオルさんから電話がかかってきたんだ。それで、すぐに飛んできてわけさ。やっぱり携帯電話は役に立つなあ。(とポケットから携帯電話を出して) 今からでも、ほしければやるぞ。

ケンジ
父さん

いいよ。おまえだって、突然、病気になるかもしれないだろう？ その時、周りに誰もいなかったら、どうする。「あの時、もらっておけば」って後悔しながら、息を引き取ることになるんだぞ。

ケンジ

後悔なんかしないよ。僕は一人で何とかする。

父さん
ケンジ

しかし、父さんは心配なんだ。僕のことなんか、気にしなくていいんだ。僕は一人で生きていけるんだから。

そこへ、カオルさんがやってきた。

カオルさん
父さん

あ、お帰りなさい。あ、ただいま。いや、ケンジ。今の「お帰りなさい」と「ただいま」に、深い意味はないんだ。父さんはいさつきお見舞いに来て、カオルさんに買物を頼まれた。それで、今、帰ってきたっていうだけで。

ケンジが走り出そうとする。その手を、父さんがつかんだ。

父さん
ケンジ
父さん
ケンジ
カオルさん
ケンジ
父さん
ケンジ
父さん
ケンジ
父さん
ケンジ
父さん
ケンジ

待てよ、ケンジ。
放せ。

いいから、落ち着いて、話を聞くんだ。父さんは、本当にお見舞いに来ただけなんだ。ここで暮らしてるわけじゃない。

そんなのどっちでもいいんだ。父さんはカオルさんと一緒に暮らせばいい。勝手に暮らせばいいんだ。

それは、おまえがいいって言うてくれたらの話だ。

（父さんの手を振り払って）じゃ、母さんは。母さんはどうなるんだよ。父さんはカオルさんと幸せになつて、母さんはボクの心配だけして年を取

つていく。そんなの不公平だよ。父さんから見れば、まったく逆だ。母さんはケンジと暮らせて幸せだったけど、父さんは月に一度しか会えなかつた。これからだつてそうだ。

家を出ていったのは、父さんじゃないか。それは、仕方ないことだったんだ。

仕方ない、仕方ないって、父さんも母さんも言うけど、言われる方の身にもなつてみるよ。

私、向こうへ行ってます。

父さんが結婚したら、おしまいなんだ。

何が。
カオルさんなんか、いなくなればいいんだ。
ケンジ！ カオルさんに謝れ。
いやだ。

父さん おまえはそんなことを言うためにここへ来たのか。

ケンジ ボクは別に来たくなんかなかった。

父さん 昨日だって来たくせに。

ケンジ 兄さんを連れ戻すために来たんだ。母さんに隠れて、カオルさんに会おう

父さん とするから。

ケンジ 兄さんて誰だ。

父さん 兄さんは兄さんだよ。

ケンジ 何を言ってるんだ。昨日、ここへ来たのはおまえだろう。ボートに乗り

父さん 来たけど、雨のおかげで乗れなかったから、ここで一時間ばかり話をして

ケンジ いった。

父さん それは兄さんだよ。ボクは部屋の前で一時間も待たされたんだ。

ケンジ カオルさん。昨夜、この部屋に来て、カオルさんと話をしていったのは、

父さん ケンジですよね？

カオルさん ええ。

父さん 他に誰かいましたか？

カオルさん いいえ。

父さん ケンジ。おまえが言ってる兄さんていうのは、一体誰のことなんだ。

ケンジ 兄さんは、兄さんは……。

父さん それは、おまえ自身のことだな？

ケンジが走り去った。

父さん ケンジ！

カオルさん
カオルさん
カオルさん
カオルさん

さつきまでは、笑いながら話をしてたんですけど。
それはきつと、もう一人のケンジだったんです。
もう一人の？
あなたを好きになっちゃったケンジです。

ケンジが走ってきた。その後を追って、ボクが走ってきた。

ボク 待てよ、ケンジ。

ケンジ ついてくるな。

ボク そういう言い方はないだろう。俺はおまえの兄貴なんだぞ。

ケンジ おまえは兄さんじゃない。ボクでもない。おまえなんか、いないんだ。

ボク でも、おまえはいると思ってる。

ケンジ 思っけない。

ボク だったら、どうして俺が見える？ それは、おまえがいてほしいと思っ

ケンジ るからだろう？

ボク 思っけない。思っけないんだ。

ケンジ カオルさんの部屋へ帰ろう。帰って、「ごめんなさい」って謝るんだ。

ボク いやだ。

ケンジ 本当は、カオルさんが好きなくせに。

ボク 好きじゃない。カオルさんなんて、嫌いだ。

ケンジ そうだ。おまえはカオルさんが嫌いだ。でも、同時に大好きでもあるん

ボク だ。だって、おまえは俺なんだから。

ケンジが机に乗った。

ボク　　おい、おまえ、何をする気だ？　まさか、ボートに乗るつもりか？

ケンジ

ボク　　小学生は、一人で乗っちゃいけないんだぞ。池の真ん中で動けなくなつて

ケンジ　も、知らないからな。

ボク　　うるさい。

ボク　　わかつたよ。

ケンジがパドルを漕ぎ始めた。ボクが机を押す。机がゆっくりと動き出した。

ボク　　母さんには「乗らない」って言ったくせに。結局、約束を破るんだから。

ボクも机に乗った。

ボク　　おいおい、そっちは行き止まりだ。水門にぶつかるぞ。

ケンジ　雨が降ると、井の頭池の水門は開くんだ。

ボク　　まさか、池の外へ出るつもりか？

ケンジ　カヌーは、川を下るためにあるんだ。

ボク　　これのどこがカヌーなんだよ。

ケンジ　ボクはカヌーに乗りたかつたんだ。何も考えないで、川の流れだけに集中して、パドルを漕いでみたかつたんだ。

そこへ、父さんが走ってきた。

父さん
ボク
父さん
ケンジ
父さん
ケンジ
父さん
ケンジ
父さん
ボク
父さん
ボク
父さん
ボク
父さん
ボク
父さん
ボク

ケンジ！
父さんだ。水門の横にいる。
ケンジ、戻ってこい。
いやだ。
そのまま行ったら、外へ出ちやうぞ。すぐに岸へ戻るんだ。
ボクは外へ出たいんだ。
外は危ない。雨で増水して、流れが早くなってる。
父さん、携帯電話を貸してよ。
携帯電話？
危なくなったら、必ず電話するから。
バカなことを言うんじゃない。
でも、もう外へ出ちやうよ。
あー、もー。(と携帯電話を投げる)
(受け取って) ありがとう。
よし、外へ出るぞ。神田川だ。

ケンジがパドルを二つに分けて、片方をボクに渡す。二人でパドルを漕ぎ始める。

川の流れは早かった。が、細長いカヌーと違って、ボートは横幅があるから、安定性が高い。障害物さえよければ、なんとか転覆しないで済んだ。普段は汚い神田川も、雨で増水しているせいとか、それほどひどくは匂わな

かった。驚いたのは、水面から見た目の前の景色だ。コンクリートの壁に挟まれた青い空。東京にも空があることを、ボクはすっかり忘れていた。

ボクが携帯電話のボタンを押す。遠くに、コーキチくんが現れた。

ボク　もしもし、もしもし。

コーキチくん　はいはい、コーキチですが。

ボク　ボクだよ。ケンジだよ。

コーキチくん　あれ？　こんな時間に何だよ。今、塾じゃないのか？

ボク　サボっちゃった。

コーキチくん　バカ。お母さんにバレたら怒られるぞ。で、今、どこにいるんだ。

ボク　神田川。

コーキチくん　神田川？

ボク　井の頭池から、ボートで下ってるんだ。コーキチくん、東京都の地図、持

コーキチくん　持ってるけど、おまえ、神田川なんか下ってどうするんだ？

ボク　どうもしないよ。なぜ川を下るのか。それは、そこに川があるからさ。

コーキチくん　しかし、雨上がりの神田川は、三級か四級の流れだぞ。沈でもしたら、大

変なことになるぞ。

ボク　だから、電話したんだよ。何かあったら、相談相手になってもらおうと思

って。また電話するかもしれないから、勝手に出かけたりしないでね。じ

ゃあね。

コーキチくん　おい、ケンジ！

ボクが電話を切った。

ボク 井の頭池を出た神田川は、まず南東へ進む。久我山、高井戸、浜田山を突

ケンジ っ切つて、下高井戸の辺りで北東へ進路を変える。

ボク 今、どこにいるのかな。

ケンジ わからないな。さつきから、同じような家しか見えないだろう。

ボク あ、あっちから、別の川が流れてきた。

ボク これでまた水の量が増えるぞ。気をつけてくれよ、船頭さん。

そこへ、電話がかかってくる。遠くに、父さんが現れた。

ボク はい、ケンジ丸ですが。

父さん バカやろう。いつから漁船になったんだ。

ボク あ、父さん。こっちは大丈夫だよ。沈しないで、ちゃんと進んでる。

父さん 「沈」てなんだ。

ボク カヌー用語で、「沈没」のこと。初心者は、沈すると溺れることもあるんだって。

父さん 縁起でもないこと言うな。で、今、どこにいるんだ。

ボク わからないけど、さつき小さい川と合流した。

父さん 善福寺川だな。とすると、方南町か中野坂上の辺りか。

ボク へえ、父さん、神田川に詳しいんだね。

父さん あの後、本屋へ飛び込んで、地図を買ったんだよ。

ボク
父さん

まさか、どこかで待ち伏せしようって言うんじゃないだろうね？
おまえが自分で降りなければな。いいか、ケンジ。沈没してからじゃ、遅
いんだぞ。すぐにボートを岸につけて、降りるんだ。

ボク

でも、岸なんかどこにもないよ。

父さん

ケンジ、もう一度、父さんと話をしよう。おまえの気持ちも考えないで、
父さんは悪かったと思ってるんだ。

ケンジ

電話を切つてよ。

父さん

カオルさんがそんなにいやなら、もう一度初めから考え直すから。

ケンジ

切つてよ。

ボクが電話を切る。

ボク

東中野を抜け、下落合まで来ると、川は東へ進路を変えた。前方に銀色の
電車。山手線だ。

ケンジ

あつちは西武線だ。高田馬場に着いたんだ。
凄いな。ここまで一度も沈してないぞ。

ボク

もう五十キロぐらい進んでるよね？
バカ。東京つてのは、そんなに広くないんだよ。せいぜい二十キロくらい
だろう。

ケンジ

手がしびれてきちゃった。
そろそろ降りるか？

ボク

そろそろ降りるか？

ケンジは黙ってパドルを漕ぎ始めた。そこへ、電話がかかってくる。遠くに、母さんと

アベさんが現れた。

ボク 今、高田馬場。ちゃんと生きてるから、電話しないでよ。

母さん ケンジ。
（受話器を手で抑えて）母さんだ。

ボク ケンジ、お父さんから電話があったわ。ボートに乗ってるんだって？

母さん 約束、破ってごめん。

ボク （受話器を奪い取って）あなた、帰ってきて。私を小学生で未亡人にしな

アベさん いで。

ボク ボクのこととは諦めて、他にいい人を見つけてくれ。

アベさん いやだ。こんな初恋、いやだ。

母さん （受話器を奪い取って）ケンジ、カオルさんともう一度会ってあげなさい。

ケンジ いやだ。

母さん 私のことを思って反対してるなら、そんな必要ないわ。私は、お父さんの

ケンジ 結婚に賛成なの。あんな不器用な人は、いつまでも一人でいない方がいい

母さん のよ。カオルさんも、悪い人じゃないみたいだし。

ケンジ 母さん……

母さん 後は、ケンジの気持ちだけ。ケンジがカオルさんのことを好きになっ

ケンジ ければ、私たちは今まで通りに暮らしていけるのよ。

母さん 今まで通り？

ケンジ 一つの家で暮らせなくても、私たちは家族なんだから。

母さん ボクは一人になりたいんだ。

ケンジ

母さん

ケンジ　　ボクは一人になりたいんだ。

ボクが電話を切る。

ボク　一人になれるから、カヌーに乗りかっただのか？

ケンジ　でも、まだ兄さんがいる。

ボク　陸から見れば、一人にしか見えないよ。

ケンジ　（前方を見て）あれは。

ボク　橋桁だ。このまま行ったら、ぶつかるとぞ。

ケンジ　どうしよう。

ボクが携帯電話のボタンを押す。遠くに、コーキチくとセコ先輩が現れた。

コーキチくん　もしもし、ケンジか？

ボク　コーキチくん、今、正面に橋桁が見えるんだ。

コーキチくん　橋桁？

セコ先輩　（受話器を奪い取って）セコだ。橋桁は、カヌーの最大の敵だ。だから、

ボク　なるべく距離を取って、通りすぎるんだ。

セコ先輩　でも、このボートは橋桁に向かって進んでるんだ。

ボク　スウィープ・ストロークは知ってるか？

セコ先輩　知らない。

ボク　じゃ、俺が説明するから、その通りにパドルを漕げ。今から、進路を右に変える。

ボク
セコ先輩

わかった。
まず最初に、左のブレードを思いっきり前に突き出せ。次に、なるべく遠くの水面で、しかもカヌーぎりぎりの場所に突き刺せ。最後に、自分のお尻を軸にして、できるだけ大きな円を描くように動かせ。

ケンジがスイープ・ストロークをした。ボクが机の向きを変えた。

ボク
セコ先輩

あっ、ボートが右へ向いた。進路が変わった。今、橋桁の横を通過した。よし！

ボク
コーキチくん

ありがとう、セコ先輩！
（受話器を奪い取って）がんばれよ、ケンジ。かんばって、川と遊んでこいよ。

ボクが電話を切った。二人が空を見上げた。

ボク

早稲田を過ぎると、川は首都高速の下に入った。江戸川橋、飯田橋、水道橋。そして前方高くそびえるのは、お茶の水の聖橋。

遠くに、父さんが現れた。

父さん

ケンジ！

ボク

父さんだ。（と指さして）見ろよ、橋の上にいる。

父さん

カオルさんのことは諦める。だから、ボートを降りてくれ。

ボク
父さん

見ろよ、ケンジ。父さんを見ろよ。
父さんが許せないなら、許さなくてもいい。だから、帰ってきてくれ。生きて帰ってきてくれ。

ボク
ケンジ

どうして見ないんだよ。
ボクは一人になりたいんだ。

ケンジはボートを漕ぎ続けた。

ボク

聖橋をくぐり抜け、昌平橋をくぐり抜け、万世橋をくぐり抜けると、再び前方に銀色の電車。そこから後は真直ぐだった。井の頭池を出てから三時間。ケンジはついに神田川を下りきった。浅草橋のその先は、川幅百五十メートルの隅田川だった。

ケンジがパドルを漕ぐ手を止めた。

ボク

とうとうやったな。

ケンジ

うん。
疲れただろう。しばらく寝っ転がってようか。

ボク
ケンジ

どうした？
匂いだよ。

ボク
ケンジ

そうか。これは、海の匂いだな。

そこへ、電話がかかってくる。

ケンジ

出なくていいよ。

ボク

でもな。父さん、泣いてたぞ。

ケンジ

いいよ。

ボク

……出るぞ。

遠くに、カオルさんが現れた。

カオルさん

もしもし、ケンジくん？

ボク

カオルさん？

カオルさん

大丈夫？ 一人でちゃんとやってる？

ボク

(ケンジに) 出るよ。

ケンジ

いやだ。

ボク

ダメだ。おまえが出るんだ。(とケンジに受話器を押し付ける)

カオルさん

もしもし、ケンジくん、どうしたの？

ケンジ

……隅田川に出たよ。一度も転覆しなかった。

カオルさん

よかったわね、うまくできて。

ケンジ

……うん。

カオルさん

私が乗せてあげるって言ったのにね。約束を守らなくて、ごめんね。

ケンジ

もう乗れたからいいよ。

カオルさん

ケンジくんは、やっぱりお父さんと、お母さんと、三人で暮らしたいんでしょ？

ケンジ
カオルさん
ケンジ
カオルさん
ケンジ
カオルさん
ケンジ
カオルさん
ケンジ
カオルさん
ケンジ
カオルさん
ケンジ
カオルさん
ケンジ
カオルさん
ケンジ
カオルさん
ケンジ
カオルさん
ケンジ
カオルさん

そんなの無理だよ。
でも、本当はそうなんでしょう？
……
それなら、私はもうお父さんと会わない。
え？
ケンジくんとも、二度と会わない。
どうしてだよ。父さんと結婚したいんじゃないのかよ。
いいのよ。
よくないよ。ボクのことなんか、気にすることないんだ。別にボクの母さんになるわけじゃないし。
私だって、ケンジくんのお母さんになれるとは思ってないわ。
それなら、勝手に結婚すればいいだろう？
私はね、私の結婚を、みんなに喜んでほしいの。もちろん、ケンジくんにもね。
……
ケンジくんに悲しい思いをさせてまで、お父さんを取り上げたくない。
なんとか言えよ。
だから、さよならね。
ケンジ、なんとか言えよ。
お父さん、心配してるから、早く帰ってあげてね。
ケンジ！
じゃ。

カオルさんが電話を切る。

ボクがボートを降りる。

ボク

それから十年。ボクは今でも、彼女の部屋の番号を押し続けている。今では、彼女は別の部屋で、別の電話を使っているだろう。他の誰かと結婚して、子供も生まれて、ボクのことなんかすっかり忘れているだろう。それでも、ボクは電話をかける。十年前のこの番号で。この番号を押し続ければ、いつかはあの時の彼女につながるかもしれない。ボクの祈りは光の速さを超えて、時の流れを逆上るかもしれない。

ボクが電話をかける。遠くに、カオルさんが現れた。

カオルさん

もしもし。

ボク

カオルさんの声だった。十年前、ボートの上で聞いた、カオルさんの声だった。

カオルさん

もしもし、もしもし。

ボク

…カオルさんですか？

カオルさん

ケンジくんね？ さよならって言ったばかりなのに、どうしてかけてきたの？

ボク

ボクはただ、どうしてもカオルさんに言いたいことがあって。

カオルさん
ボク
カオルさん
ボク
カオルさん
ボク
カオルさん
ボク
カオルさん
ボク
カオルさん
ボク
カオルさん
ボク
カオルさん
ボク
カオルさん
ボク
カオルさん
ボク
カオルさん

言いたいことって？
ボクは、ボクはカオルさんが好きだったんだ。
私も、ケンジくんが好きよ。
カオルさんの家へ行ったのは、ボートに乗りたかったからじゃない。カオルさんに会いたかったからなんだ。
それぐらい、大人の私が気づかないと思う？
だから、父さんと結婚しても構わなかったんだ。カオルさんが幸せになれるなら。
私もケンジくんに幸せになってほしいのよ。そのためには、私はいない方がいいの。
いいんだよ。結婚していいんだよ。
嘘よ。心の底では、そう思っていない。
思ってるよ。カオルさんがいなくなっちゃって、父さんと母さんは、もう一緒に暮らさない。そんな可能性は全然ないんだ。
でも、ゼロとは言えないでしょう？ 今のケンジくんには、その可能性が必要なのよ。
必要ないよ。ボクは一人で生きていける。
私だって、一人で生きていけるわよ。だから、心配しないで。
：：ごめんなさい。
謝ることないのよ。私は私で、ちゃんと幸せになってみせるから、大丈夫。だから、許してあげてね。
誰を？
あなた自身を。

カオルさんが電話を切る。

ボク

ボクの中には、いつもあの時のケンジがいた。カオルさんを止めなかった、小学生のケンジがいた。ボクに許してもらえずに、ボートの上で泣いているボク。こいつの時計だけは、十年前に止まったまま、一秒も進んでいないのだ。ボクが止めてしまったから。

ボクがボートに乗る。ケンジがパドルを漕ぎ始めた。

ボク

ボートが永代橋をくぐると、隅田川は二つに分かれた。右へ進むと佃大橋。ボクはどんどん強くなってくる海の匂いを嗅ぎながら、ぼんやりと水面を見つめていた。西の空が少しづつ橙色に染まり始めている。ボクの旅も、そろそろ終点らしい。やがて、左手に晴海埠頭が見えた。

ボクがパドルを漕ぎ始めた。

ボク

さあ、もうすぐ日が暮れる。早く帰らないと、また母さんに怒られるぞ。帰りたくない。

ケンジ

このまま海へ出て、アメリカまで行くつもりか？
そんなの無理だよ。

ボク

さあ、岸だ。降りて降りて。

ケンジがボートを降りる。

ボク (パドルを差し出して) ほら、持っていけよ。

ケンジ 兄さんは？

ボク 俺は、ここでお別れだ。

ケンジ 一緒に帰らないの？

ボク おまえももう六年生だし、一人でなんとかなるだろう。

ケンジ でも……

ボク 俺も一人でなんとかするからさ。

ケンジ ……母さんには、なんて謝ればいいのか。

ボク 俺に頼るな。これからは、おまえ一人で考えるんだ。

ケンジ ……できるかな？

ボク できるさ。おまえなら、きっとできるさ。

ケンジ 本当に？

ボク 本当さ。だから、早く行けって。

ケンジ (帽子を差し出して) これ、あげるよ。

ボク (押し返して) いらないよ、そんな小さいの。

ケンジ (もう一度差し出して) でも、あげるよ。ボクにもちよっと小さくなってきてるんだ。

ボクが帽子を受け取る。ケンジが歩き出す。

ボク 時計が動き始めた。

ボクの頭上に、ひとすじの砂が落ちてくる。その砂を、ボクはケンジにもらった帽子で受け止めた。ボクは一人で受け止めた。

∧ 幕 ∨